赤城山　南城 一夫
1948ころ

春陽展を中心に活躍。詩情あふれる点描風の作風で、黙々と制作に打ち込んだ。朝夕に眺めたであろう赤城山からは、深い思いが伝わる。

前橋コレクション

２月25日㈮から収蔵美術展が開催されます。美術館構想が進められ、芸術に対する機運が高まる中開催される今回の美術展。今回は市の収蔵する美術品について文化国際課に話を伺いました。

担当は市民編集委員　手塚・吉田。

問い合わせは　**文化国際課　☎898－5825**

市民が作る 市民編集のページ Vol.90

本市が所蔵する美術品

本市の収蔵美術品の総数は現在約８５０点。その多くは油彩の絵画です。郷土ゆかりの画家を中心に、二科展や日展会員など、全国的に活躍している作家の作品を収集していて、そのような作家の遺族から市に寄贈された作品などもあります。平成６年度からは、専門委員会を立ち上げ、収蔵に適している作品かどうかの審査を行っています。

これらの収蔵作品は、平成７年から毎年１回のペースで開催している収蔵美術展で公開しています。毎回30点～50点が展示されるこの美術展は、延べ３万人余りの市民が訪れているそうです。

しかし、収蔵作品に対する市民の理解度は、まだ十分とはいえないと思われます。また、これら多数の作品は、展覧会以外には市民の目に触れることがないのが現状だそうです。人々に見てもらってこそ、その真価を発揮するのが美術品だと思います。本市の文化レベルを上げるためにも、もっと市民の皆さんの目に触れる機会を増やしてほしいと思います。

テーマは「秘密の裏側」

本年度の収蔵美術展のテーマは「秘密の裏側」。本市出身の詩人・萩原朔太郎の短編小説「猫町」に記されたワンフレーズです。日常の見慣れた風景も異なる方向から見つめ直すことで、新しい発見ができるのではないか。そんな視点に立った作品が、収蔵作品の中から厳選し展示されます。さらに今回はそれらに加え、本市出身の若手作家４人の映像や絵画、彫刻などの意欲的な取り組みを紹介。

今回は、今まで主会場であった市民文化会館が工事中ということもあり、会場を中心商店街に移して前橋文学館、前橋プラザ元気21別館、ミニギャラリー千代田の３カ所で展示されます。中でも美術館予定地である前橋プラザ元気21別館は午後10時までライトアップされ、ガラス越しに「前橋の新しい息吹」が浮かび上がります。これらをトライアングルに巡る、美術鑑賞の小さな旅。道すがら出会った風景や人々の営みも、新たな目を通して生まれる「もう一つのアート作品」として楽しんでもらいたいという願いも込められているように思われます。

展示される収蔵作品には画家たちの郷土への深い愛情が込められています。描かれているのは赤城山、浅間山、山頂の雲、そして駅舎など。そこには時に清らかな空気が張り詰め、時に温かな光が満ち満ちています。30年、50年という時を経て厳かにそこにあるものたち。それらは、かつての風景を知らない世代に何を問いかけるのでしょう。

「つながる美術館」始まる

現在、本市では平成24年度中の開設を目指して美術館構想が進められています。コンセプトは「アートでつながる市民の創造力」。日常の中で新しい芸術に触れることができ、地域の文化活動を支えていく拠点にすることが目標だそうです。また、美術館ができることで、収蔵美術品の常設展示と適正な保管が可能になります。

美術館構想は、市の美術館に関する検討委員会の提言をもとにパブリックコメントが行われ、その基本構想が作成されました。

さらに、その基本構想の具体化に向けて、本市出身の東京芸術大美術学部長・池田政治さんを委員長とした委員会が設置され、昨年11月に美術館設置の基本計画が策定されました。今後は、この基本計画に沿ってさらに美術館のあり方、市民とどうつながりを持って運営されるかなどが検討されることになるそうです。たくさんの収蔵作品が美術館に常設展示される日が、一日も早く訪れることを期待したいと思います。

編集後記

美術品を見ながら中心商店街を巡る小さな旅。収蔵美術展は、絵画や彫刻などだけでなく幅広い創造行為を「アート」ととらえる美術館計画の理念を体現する一つの契機になるかもしれません。出会った人々や風景を携帯電話で撮影してみたり、即興詩を詠んでみたりと、新しい発見を楽しむ創造を想像してみるとワクワクします。そんな創造がまちの活性化につながっていくのではないでしょうか。心遊ばせることの楽しさを忘れかけている自分に気付いた今回の取材でした。

平成22年度収蔵美術展

コレクション+ 風景の裏側

日時＝２月25日㈮～３月27日㈰、午前９時30分～午後５時30分（金曜は午後７時まで。月曜休館）

会場＝前橋文学館、前橋プラザ元気21別館、ミニギャラリー千代田（千代田町二丁目）

展示作品＝〈**収蔵作品**〉南城一夫、田中青坪、清水刀根、福田貂太郎、中村節也、髙橋常雄など〈**若手作家**〉今井由佳、牛嶋直子、小泉明郎、須藤和之

浅間高原（６）　田中 青坪
1981

日本美術院を中心に活躍。洋画的なタッチと明るい色彩による作風を展開し、晩年は故郷の浅間山をテーマにした作品を発表。

雪景　清水 刀根
1952

二科展を中心に活躍したほか、群馬美術協会の創立に参加。群馬大教授として後進の育成に当たる。揺るぎない画面構成の中に、穏やかな心情が表れている。

噴水（前橋駅前）　福田貂太郎
1978

独学で制作を続け上京。晩年は前橋にアパートを借りながら赤城山シリーズに取り組む。洋風木造建築の旧駅舎を描くなど、郷土への強い愛情が感じられる。

〈敬称略〉